
変態なA君

病芽狂気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変態なA君

【Nコード】

N6140Q

【作者名】

病芽狂気

【あらすじ】

変態とは何か。

それは哲学までに派生し、常人の理解を超えたベスト・オブ・変態のAが語った学校生活での日々。

階段での出遭い（前書き）

主人公：神崎ゆの

変態：通称 A

階段での出遭い

紛れもなく変態だった。

これは変態王子の名をほしいがままにしていたAの物語である。

「おい、A。そんなことやめろよ！」

Aを校内で見つけたのは偶然だった。

階段を上る途中にAの背後を見たのだ。

「何だ、ゆの君か。止めないでくれるかな」

Aの行っている行為はおおよそ人間には認められぬ所行であった。

「ふざけるなよ、その通り過ぎる女子の髪を後ろから嗅ぐのをやめろというんだ」

階段下からスカートの中身をうつかり覗いてしまうという淡い青春ならどれだけよかっただろうか。

こいつは事もあるうに階段の踊り場で待機し、上っていく女生徒の後ろ髪をくくんしていたのだ。

「じゃあ、逆にゆの君。君はこれが何だと思うのだ？」

「何って……」

「俺は誰に裁かれるんだと聞いているんだよ。法か？ 国か？ 違うな、誰も俺を裁くことはできないっ」

Aは笑っていた。

そうだ、他人のにおいを嗅いで犯罪など聞いたことがない。

俺は馬鹿だった……。強制わいせつ罪という言葉があるが、何をもってわいせつというのか。

それは被害者側の不快感指数にあるだろう。

後ろからにおいを嗅がれて誰が気づくんだ？

階段を上るといふ誰もが意識を上に向けるこの場所で誰が後方からにおいを嗅いでくるなどと意識するのか？

俺はA君の変態レベルに絶望的な高さを感じた。

「言ってる……」

「——なに？」

「今から通り過ぎる女子生徒に髪の毛がれてますよって言うよー!」

「はっ、そんな勇気がお前にあるのか？ 小学校の頃は好きな女の子とまともに話すことすらできなかったお前が、この全校生徒が行き交うこの階段で？」

静かに頷く俺。

Aも馬鹿じゃない。俺はひそかに焦っていた。

見ず知らずの女生徒にどんな顔をしてそれを告げればいいのか。

こんなAがもし俺の友達と思われてしまえば、俺の校内での噂も最悪のものとなるだろう。

「ゆの君が黙っているだけで、君は平穏な学校生活を満喫できる。お互いまだ入学したばかりなんだし、事を起こすのは少し浅はかなんじゃないかい？」

「でも、そんな事が許せるはずないだろ」

「羨ましいか？」

「んなわけあるか！」

一瞬、好きな女子の髪のおいを嗅ぐという行為にぐらつときたものはあったが、すぐにそれを打ち消した。

俺はAのようにはない。

「なら、好きなようにすればいいさ。俺は君程度の人間に怯んで自分の意志を曲げるような男じゃない」

男らしいのか変態なのか、よくわからないヤツだ。

いや、変態だ。

筋金が入った変態なんだ、こいつは。

誰も来ないでくれと鞆を置いてAの監視を始める俺。

しかし、ここは中央階段。

早朝堂々と変態行為をしているAの気が知れない。

次々と女生徒がやってくる。

ところが、Aは一向に動かない。俺が見たときは確かに嗅いでいたのに――。

「俺がどうして行動しないか不思議かゆの君」

「い、いや……」

まるで心を見透かしたようにAは言った。

「二流のやつは誰彼かまわず女を欲するが、俺は違う。一流は相手を選ぶ。故に一流だ」

突然わけのわからないことを言い出したA。

俺は聞くのも馬鹿らしくなって予鈴までAの眼鏡にかなう女子が現れないことを祈った。

入学の祝いに買って貰った腕時計をよもやこんなくだらないことに使うことになるなんて思いもしなかった。

「後……2分か……」

俺も出来ればそんなことを教えてやりたくはない。

でも、もし、それを毎日のようにやれている女子がいると思うと、
気味が悪いのを通り越してもはや呪いの領域だと思う。

さながらAは呪縛霊で、俺は憑き物を落とす祈祷師のようなものだ。

「1分……」

チャイムさえ鳴ってしまえば、Aはこの場を立ち去るだろう。

そうすれば今日だけは救われる。

少なくとも変態なAの被害者は俺の目の前で現れないで済むのだ。

残り三十秒と迫った時だった。

不意にAがスタンディングポーズを取った。

見ると駆け上がってくる女子が一人いた。

それも今まで通り過ぎた中では類を見ない遠目からでもはつきりと解る美少女だった。

思わず目を見張ってしまうほどの可憐な動きは慌ただしく駆けているのにも関わらず、一片のよどみもない流麗さを持っていた。

「やめろ、A！」

しかし、Aは目を血走らせてロックオンしていた。

どうする？ あんな可愛い子にそんな残酷なことを告げるのか？

俺はとにかく棒立ちのまま、美少女が上がってくるのを待った。

「ふー、ふーっ……」

何の音だ？ Aの鼻息だ。

信じられない。こいつは自らを過呼吸状態にして、最大限の気体を取り込もうとしているらしかった。

あれじゃ髪だけじゃ済まされないだろう、恐らくは体臭の全てを嗅ぐような勢いだ。

たんとんと小気味良い音が目の前の数メートルにせまった。

美少女はちらつとこちらを見たが、息を呑むほど可愛かった。

だが、そんな心の熱さえも隣の変態によってすぐに霧散する。

美少女の視線が今まさに外れた瞬間、四つん這いになって駆け出すAの姿を俺はしっかりと見た。

俺は彼女に忠告した時、彼女の心はもう折れているだろうと確信した。

つまり、Aを止めなければ彼女を本当の意味で守れないということだ。

「させるかああ——ッ！」

存外に素早い動きで階段を上っていく美少女に対して、階段を四つの足で駆け上がるA。

そしてその後ろを俺が走る。

美少女は殺気でも感じ取ったのか、突然二段飛びになった。

可愛いのに身体能力が高いとは、なかなか希少種かもしれない。最初みたときの可憐な動きはこのしなやかな筋肉によって生まれているのだろぅとどこか冷静な頭がそれを理解する。

しかし、敵もさることながら四つ足で駆けるAである。

これはもはや人間を超えた生き物かもしれないと、つまるところ変態とはここまで昇華して初めて変態なのだと理解できる。

「ふっ——！ ふっ——！」

階段を抜けると一直線の廊下になる。

もはや、女子が走って逃げ切れるコースではない。

俺は全力でAの動きを止めるために手を伸ばした。

しかし、手は空を掴むばかりで一向に差が縮まらない。

「まずい、廊下だ——」

廊下に出たAはすかさず人間に進化し、二足ダッシュだ。

その姿は例えるならがに股ダッシュ、妙に低姿勢で走るべき体勢ではなく、おかしな動きだった。

そのまま目の前の美少女が不意に止まれば、よもやAの腰の逸物が綺麗にドッキングしてしまうだろう危険性さえ孕んでいる。

そんな姿勢で走るもんだから、美少女には追いつかないし、俺はAを捉える一歩手前まで来た。

——ガラガラ。

「捕まえたぞ！」

見事にAを後ろから拿捕し、俺は充実感を感じていた。

「え、なにあれ……。やだ、ちょっと……」

後ろからがに股の男を羽交い締めする俺。その姿はさも滑稽だろう。

しかし、妙に視線が多い。

「え？」

見ればその一団はクラスという名の教室の生徒たちだった。

入学早々、俺の名前は地に落ちたと確信した。

階段での出遭い（後書き）

社会的風潮を乱す恐れがあるため、絶対にマネしないでね（*^

|^*）

女の子にこんなことしちゃダメだぞ♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6140q/>

変態なA君

2011年10月5日22時16分発行